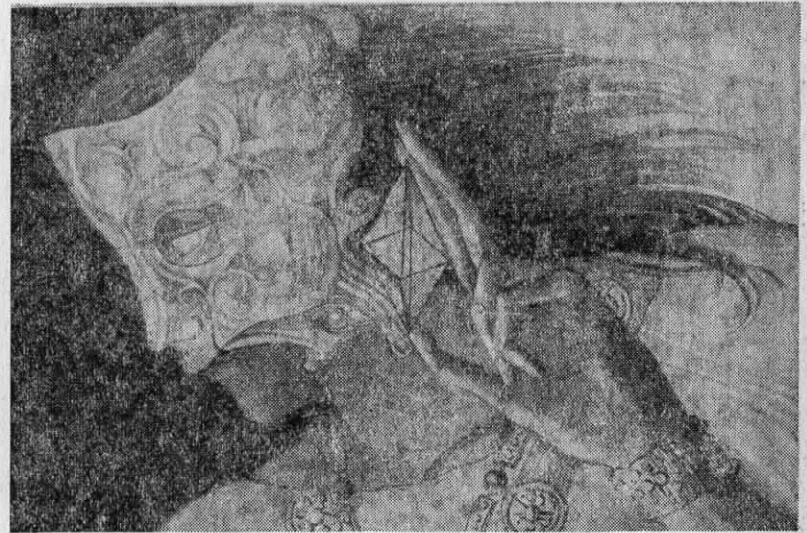


蒼白者の行進

第六回



中井英夫

絵・建石修志

第一章

IV

第一の蒼白者

仮面者の登場。――

ついにS町にも、ヨワックと呼ばれるあの薄明の季節が訪れたのであるうか。地表は凍てついたツンドラに変わり、その白夜のひととき、おびただし霊魂、さらには存在の所有者イヌアも漂い始めるその季節に、必ず仮面者は出現する。それは、あらゆる生物・無生物の背後にイヌアが潜んでいる証しでもあった。

男たちに援け起され、よろめきながらバァ「彩」に入ってきたその女は、古風な被布を纏い、いかにも田舎じみたなりをしていたが、その顔に貼りついた薄い肉いろの仮面は、エスキモーの手作りのように稚拙なものではなく、ひどく精巧を極めているだけに、得体の知れぬ怪物を思わせた。硬はったまま動かぬ絶対の無表情、そのうつろな眼窩は、中に人間

の顔が潜んでいるとも思えない。初めは啜り泣きとしか聞えなかった不明瞭な音声、抑揚もなく低く洩れ続け、それは次第に忌わしい呪詛に変わった。そここに固まり合った客たちは、ついまいしがたまで台本の上で見ていた登場人物を正眼に迎えたのである。

「ほんなこてお前はどこにおっとじゃるか。声も聞えんし、手ばさしのべてくる気配もせんが、晩には大概ここに居って聞いとったから、やっとなこつ訪ねて来たどばい。うちん顔は、いっちょん見ることななこて崩れてしもたし、元ん顔ばしてお前と会うちこつも出来んばってん、こげんして仮面ばつけて汽車に乗るとるあいだ、どげん恥ずかしか思えばしたこつか。さあ、早よ手ばくれんか、温か手を、早よ」

髑髏を思わせるうつろな眼が、客のひとりひとりを撫で廻し、這いずり、それはやがて一人の青年の上にとどまった。長い凝視――といってその凝視は、人間が人間を視る形とは到底いえず、ただ暗い穴が無感動にそこへ向けられているというにすぎなかったが、その青年、藤川雅志は、呻くように「とっけんなか」と呟き、ついに追いつめられた者の声をあげた。

「とっけんなかこというな。ぬしが姉ちゃんじゃもんか。俺が大事な姉ちゃんば、そげん気味ん悪か仮面ば被って、癩病やみんごたこつばすつ筈がなか。嘘にきまっと」

癩病、という言葉を聞くと女は、一瞬その仮面の奥で凍り

ついた微笑を浮かべでもしたように、微かなみじろぎをしたが、すぐまた何かがほめてゆくような、ゆったりとした音声でこういかけた。

「なんが嘘じゃもんか。顔ば見せんでちや、声や体つきがどげん変なふうになつてちや、うちが真美だつちこつはすぐ判つた筈じゃ。うんにや、此処へこげんして来っ前、うちが病院ば脱げ出したそんな時から、もう来っか、いま来っかと氣ば揉めて氣ば揉めて悶ゆとつた筈じゃ。うちん顔ば崩れて見わけんつかんごてなつてん、顔ばつかじやなか、体じゅう腐れてしても、つるつとした肉ん塊なつてしまつてん、お前にだけは見わけがつくにきまつてる」

そういつて差し伸べる手は、ただ握りしめたこぶしであつたのかも知れないのだが、居合せた皆には、指がすべて腐れ落ちて、つるつるに光つた肉瘤のように映つた。

「そげんことはなか。嘘じゃ」

藤川雅志の声は、もうすっかり弱々しく、ただただ眼の前の仮面の女——というよりは得体の知れないこの怪物を、姉の真美だと認めまいとする眩きに等しかったが、それでも最後の氣力をふりしぼるようにして、こういつた。

「俺が姉ちゃんば閉じこめて来たところは、癩の病院じゃなか。精神病院だつた筈じゃ」

だが仮面の唇は、その一言であきらかにほどけた。めぐり上り振じくれた笑いが、動く筈もないそのおもてを通りすぎ

ましたわ」

美矢は疲れきつたようすで、怨めしそりにいい返した。

「元通りクロスの長にでもしていただけないかしら」

「台詞を変えましょう、台詞を」

柚木は八つ当りのように水口敬三をふり返つた。

「方言に無理があるんですよ。何もこれは熊本弁でなくたつていい。標準語に直して貰えませんかね」

「時間がない、時間がないんですよ」

水口はアリス物語の白兎のようなことをいつて、不服そうに口を尖らせた。

「第一、標準語にしたら、舌つたるくて仕様がないでしょう。どうとうそれをいつてしまったのね、だなんて」

「だからどんどん変えて下さいよ、感情が籠るように」
柚木も焦立たしげに答えた。

「たとえば、やっときさ白状おしだね」といういい方だつていいでしょう」

「まあしかし」

魚崎がそこで口を挟んだ。

「あれをいきなり芝居にしようというのが、どだい無理があるようですな。ここいらでちよつと休みにして、もう少し話し合つてみたらと思つてんですが」

三人のほかにはジョウにチャコ、蓋人、それに美矢たち三銃士という、実際の事件の目撃者九人が、その提案で十畳ほどの板敷きの広間に輪を作ると、魚崎はゆっくりと続けた。

ると、女は勝ち誇つたようにいい放つた。

「どうとうそっばいつてしもたね、お前」

——藤川雅志の軀がふいにかしいだ。このとき彼は、ついでに自分では名づけ得なかつた「蒼白者」に変じたのである。顔はもう誰の眼にもその言葉しか浮かばぬほどに蒼ざめ、脂汗を流し、みるまに床へ崩折れて氣を失つたのだが、それを見届けると女は、俄かに背すじを伸ばして立上り、慌しく両手をかけて自分から仮面を外した。

病み崩れた顔ではなかつた。もとより姉の真美ではない。久しく姿を見せなかつた「彩」の女あるじ朱麗の、前に変らず艶麗な、それでいて唇を引き結んだ敵しい表情がそこにあつた。

——どうとうそっばいつてしもたね、お前。

南平台に新しく設けられた劇団「彩」の稽古場で、美矢は何度めかの同じ台詞をくり返したが、その声は始めから元氣を失つて、半ば情性に近かつた。

「ダメだ、そんな迫力のないこっちゃ」

演出の柚木黄太は、容赦のない声をあげてテーブルを叩いた。

「現実その一言で相手を叩きのめすんだよ、相手を。そんな氣力のないいい廻しじゃ、どうにもなりやしない。少しでも相手をたじろがせる氣迫がなくっちゃ」

「ですからこの役、わたしにはどうしても無理だつて申上げ

「実際どうも、いまだに私はあの事件が現実にとつたとは信じられんし、思いつたたびぞつとするぐらいですが、マダムがああして何もいわんからとつて、何とか芝居の形にして真相を突きとめようとする柚木さんの発想も、それはそれとして、他に別な形で考えられませんかあ。なにしろあんまり異常すぎて」

——確かに、事態は異様すぎた。七月にはまったく姿を見せず、八月は例年のとおりに店を締めて、九月の日曜、ようやく出来上つた水口の脚本を廻し読みしているところへふいに現われるというだけならまだしも、薄氣味の悪い仮面をつけて雅志の姉に扮するという朱麗のふるまひはただごとではない。ましてそのために藤川雅志は深い昏睡に陥入り、覚醒してからも極端な鬱状態となつて、入院させた後もまったく誰とも口を利かぬままとすると、どんな弁明も通る筈はないが、朱麗は頑なに口をときとして理由をいおうとしない。

「こうなる」と人道的な問題というより、次第によつては法律がからんでも仕方のないことで、われわれはその犯行現場に居合せた確かな目撃者なんだし、いまずぐにでも犯人の朱麗を指弾することも出来る。しかし、そんな解決法をとつてみただつて、いまだ藤川君を救えるもんじやなし……」というのが、そのときの柚木の発言であつた。幸い南平台の荒れた洋館を、期限つきで安く稽古場に借りられたことだから、あの異常な事件を逆に芝居に仕立て、それを透かして真相を究明しようという発案はいささか突飛だが、皆がそれに乗氣に

なったのは、別な理由があった。大体が劇団を作ろうと最初
にいい出した光川紫野も、事件の話の話を聞くなり、

「朱麗さんのやらはりそんなことやわ」

といっただけで、その後は用事を構えて稽古場にも顔をみ
せない。さらにおかしいのは泉杏で、あれほどの剣幕で「彩」
へ乗りこんで来ておきながら、朱麗が現われたと知ってもい
っこうに喧嘩を仕掛けにくる気配もない。たまりかねた魚崎
と柚木が代表という形で神宮前の家まで訪ねてゆくと、

「朱麗さんのことならいいんですわ。兄ともいろいろ話し合
いましたし」

という挨拶であった。

二人が交々に事件の概要を語って、朱麗がここまでのこと
をする心当りはないか、少なくとも世間の常識では残酷とよ
りいようなない行為だがと問いかけると、杏はむしろ不思
議そうにこう答えた。

「それじゃ貴方がたのなさろうというお芝居は、そんなにひ
よわで脆いものでしたの？ 朱麗さんだってきつとそのおつ
もりで、餞けに幕明きの口上役でもつとめた気でいらしたん
じゃないかしら。そりゃ藤川さんて方がそんなふうにおなり
になったというのは、そのまま伺えばいかにもお気の毒です
けれど、何か別な理由がありそうね。それに折角の劇団員が
そんなことで頭がおかしくなるようじゃ、とてもプロのお芝
居は無理だと思えますけれど、いかが」

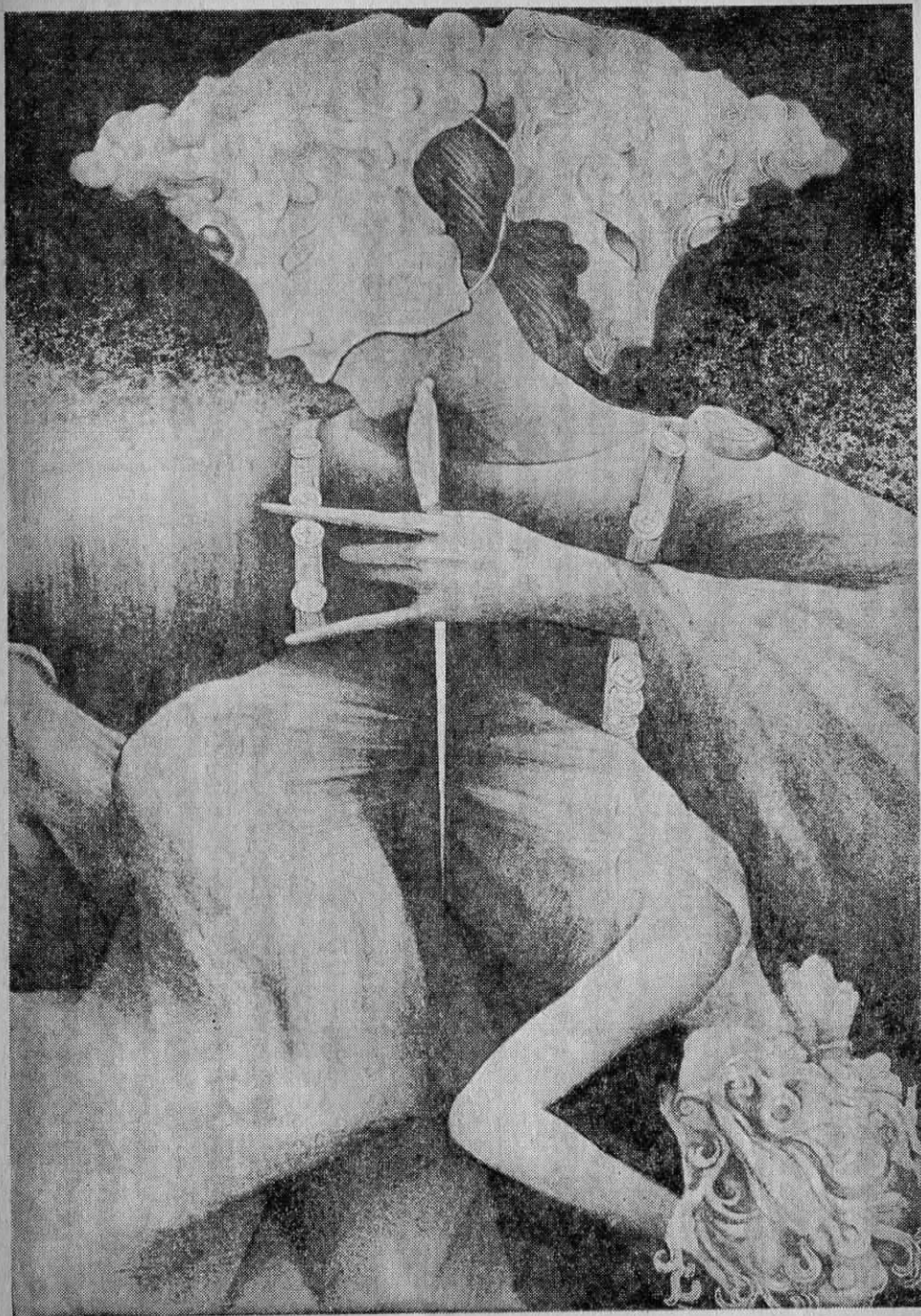
呆気にとられて黙りこんでいる二人へ、さらに高飛車に追

討ちをかけた。

「あたくしには何か判るような気がしますが、朱麗さんて
方はきつとあれね、ふいに女神のような力をお持ちになっ
たんじゃないか？ これから何を司どるのか判りませんけれど、
きつとおそろしい女神だわ。そうなるこのあとは、貴方が
たの創り出す架空のお芝居とその女神との力くらべてこと
にならないかしら。でも、もしかすると貴方がたのお芝居は、
全部復讐の女神エリーニウスへの捧げ物で終るかも知れませ
んわね」

——たぶんに嘲笑味をおびた、この明らかな挑戦が、聞いて
きた二人ばかりではない、それまで面白半分の賑やかしの
つもりで集まった連中をも、ふいに眼覚めさせ、闘志を湧か
せる結果になった。

それは芝居へのやみくもな情熱というでもない、またど
こで公演するあてがあるわけでもない、ただ皆が結束して創
り出す非現実世界が、みごとに杏のそんな御託宣を打ち破れ
ればそれで気が済むというほどの発足であったが、まず何と
しても現実に見せつけられた異様な事件——仮面の女の不意
の出現と、それが正体をあらわすまでの僅か数分の出来事——
どう思い返しても一場の悪夢としかいいようのないあのい
きさつを舞台に閉じこめ、それをより高次な、正真のドラマ
に仕上げずにはいられない気持が強かった。しかし、急ごしら
えの台本と、あり合せの人数で稽古をつけてみても、それが
到底あの現実のなまなましさに及ばないと判ってみると、俄



かに一座の上に重い徒勞ののしかかってくる思いはまた拭いようもなかった。

2

「大体、なぜあのマダムがあそこまで念入りなことをしてのけたのか、そいつをじっくり解明してみないことには、どうも」

なおもいいかける魚崎へ、

「ごもっともです」

柚木が引取って沈鬱に頭をさげた。

「まあこれは、いままでにもなんべんか話はしてきたことですが、初めからわれわれは朱麗さんの思うままに引きずられてきたらしいんですね。もっとも私は七月一日に初めてお伺いしたんで、それ以前の雰囲気はよく判りませんが、大体ふいに姿を見せなくなったこともちゃんとした理由がありそうだし、それをバーテンの謙なんてのは始めから行先を知っていてとほけていたようですね。謙ばかりじゃない、他にもそれを知っている人は確かにいた……」

ふいに鋭い眼になったが、またすぐ苦笑にまぎらわして顔をあげた。

「私にしてからが、実は朱麗さんの演出にうまく乗せられていたんだから世話はない。なにしろアルテミスの遠矢なんてことをいい出したのはこの私だし、と思って考えてみると、それも偶然じゃないんです。そのちょっと前に謙が囁くみた

もう誰が書くもんかって気になってるところへ、いきなり電話があったんです。わたしよ、誰だか判る、なんて調子で。

あなたが脚本書いているんだって謙から聞いたわ、わたしのことを絶対内緒してくれるならいいネタあげるって。八月の休みの間にずいぶん会いましたよ、榛名の別荘の方にも行っただし。だって何事も脚本のためだし、仕様がないでしょう。それが、筋立てはぼくの考えたとおりのアルテミスの呪いを表に出して、泉兄妹に緑子をからませたそれで結構だけれど、合間に眼立たぬよう藤川雅志の怯えを必ず入れといてくれて。彼、マダムには何でも親身に打明けてたらしいんで、ぼくもそんとき初めて聞いて、いい加減びっくりしっちゃったけど、彼の姉さんっていうのは、男に棄てられて死産してからおかしくなって、病院に入れるのに、彼ずいぶんてこずったんですってね。ひどく気の小さい人だから、だんだんそれを自分の責任のように思って、本人自身も相当な妄想に悩まされたいらしい。棄てたのが男じゃなくて自分だというよな……そんなことを書いたら大変でしようっていうと、いいえそうじゃないの、いまそうやって書いてあげることが、あの人の妄想を打ち砕く一番大事な助けになるんで、放っておくとどうしたって姉さんと同じ運命になるか、自殺するかの瀬戸際だっという張るんですよ、マダムは。そのためわざわざ誰にもいわず、店も休んで何度か熊本の病院まで行ってようすを見てきた、人助けだと思っというとおりに書いてちょうだいって、書き入れる方言まであの人、調べて来たんですよ。故

いにギリシア神話だのアポロンだのと話しかけてきて、オヤと思っただけで、そこまで旨く仕組んだのかどうか。むしろ彼はあの事件のときだって、あらかじめ打合せがあった時間に煙草を買いに行くふりをして、大変だ女のひとがなんて役をしたくらいだから、何もかもマダムのいいなりに動いていたんだらうけれど、ここにももう一人、前からマダムと連絡をとっていた方がおいでのようですね」

それからむしろ淡々とした声で呼びかけた。

「水口さん、あなたのあのギリシア悲劇ふうの脚本は、あきらかにマダムの手を借りていますね。いったい、いつごろから朱麗さんと会っていたんですか」

突然に素破ぬかれて、水口はみごとなほど表情を硬張らせたが、

「いつごろといったって……」

何やら口の中で、しばらくぶつと呟きながら、それでも急に坐り直すと口迅に弁解を始めた。喋り出すととまらないうふうに一気にまくし立てたが、それだけにその話には嘘もなさそうだった。

「そんな、柚木さん。ぼくまでがグルみたいに思われちゃ心外ですよ。だって貴方からどうしてもってことで、何でもいいこの夏の間に、まっとうなギリシア悲劇の形で脚本を書けっというんでしょ。それも登場人物はあその常連だけってなると、ふだん顔は合せてたって、裏に何があるのかこっちは知りやしない。暑いさなかにいい加減うだってさ、もう

郷もあっちの方らしいけど。まあ何かよっぽど深い考えがあるってのことだと思っから、いわれるとおりにしたんだけど、

あれを読んだときの藤川君の顔ってなかったから……」

「これはしかし驚きました」

魚崎が思わず独りごちるのを、柚木が遮った。

「すると朱麗さんは、向うで姉さんに会って来たんですね。どんなふうだったっていましたか？」

「それがもう全然いけなくて、大きな人形を自分の赤ん坊だと思っ抱いて、まったくの痴呆状態だっ。なんでも藤川君が夏の休みをとれそうもないというんで、代りに行ったよいうなことだったけど」

「しかし、それをなぜありのままにいわなかったんだらう」

柚木はひとり呟いてから、さらに鋭く訊いた。

「まあいい。するとマダムは、たとえばその姉さんが実は元気で会いたがってるぐらいのことをいって、それからついに病院を脱け出してこちらへ向ったなんてことを藤川君に吹きこむことも出来たわけですね」

「さあ、そこまでのことをしたかどうか」

「だってあの日のやりとりは確かそんなことだったでしょう。そうやって彼の不安を極限までつものらせておいて、もうどんな軽い指の一突きでも狂気の淵へ落としこめるぐらいにして、まだその上に……」

「そんな筈はないですよ」

水口は思わず悲鳴のように叫んだが、もとよりそれは自信

のあるわけもなかった。小心な青年を不安に駆り立て、もつともいい時期を見計って別誂えの仮面を被り、さらに言葉づかいまで習練してあそこに登場したのだとするなら——頼ということも、あらかじめもしやと思うほどに仄めかしたとするなら、雅志のあのときの錯乱も当然であり、気弱な一人の青年を葬り去ることはたやすい業だったであろう。

「でも何のためにです。理由がないじゃありませんか」

水口はなおもいいつのつた。

「あれが念入りに仕組んだことなら、アレでしょう、ホラ、安楽死と同じような、何ていうのかな、安楽狂とでもいうような……」

「それこそ、なんのためです」

柚木はすっかり冷静だった。

「それより水口さんにお聞きしたいのは、そこまでマダムの手助けをされて、そのあと彼女から何も聞いていないんですか。しかるべき目的があったものなら、ことに藤川君を妄想から救うというほどの善意の目的があったものなら、実はこういうことを考えていたんだって、あなたには打明けるのが本当でしょう。それは聞いてみたんですか」

「ええ、でも何もいってくれないし……」

「いってくれないんじゃない、いうべき理由がないからでしょう」

口調は次第に峻烈だった。

「殺人願望と同じような、企みぬいて人を狂気に陥し入れよ

うとする黒い願望。まったくそれ以外に考えられないじゃありませんか。水口さんもそこまでマダムとつき合ったものなら、大いに責任がありますね。どうです、水口さん。これは私からのお願いというより、むしろ強い要求といってもいいのですが、ここでひとつ、絶対にみごとな脚本を書いてくれないませんか。マダムの罪を告発し、併せて彼女自身がみごとにその黒い願望によって滅びてゆくというストーリーを。これは絶対に書くべきです。そうです、書くべきですよ。それをりっぱに彼女の前に演じてやりましょう」

すっかり追いつめられた水口は、あてもなく一座に視線を漂わしていたが、ようやく蓄人に眼をとめると、哀願するかのように眼をしばたかせた。べつにそれに応えるというつもりもないらしい。蓄人はいつものとおりの、口笛でも吹くような気軽さでいい出した。

「でもほく、そうしないほうがいいと思うな」

なぜ、という顔の強い視線も苦にならないようすで、あとを続けた。

「昨日『彩』に遊びに行ったんだ。うん、すいてたけどさ。ママもすっかりやつれて可哀そうみたいだったよ。でもぼくにこんなことをいうのさ、あなたもわたしのことをおそろしい女だと思っているんでしょ。藤川さんを一番めの犠にしたぐらいに思ってるんでしょ。でも皆さんが思う限りの限り、絶対に、もうすぐ二番めの犠牲者が出ることになるんだわって」

(以下次号)